有機的管理による条件不利農地の蜜源化：省力的に地力を維持・向上させる

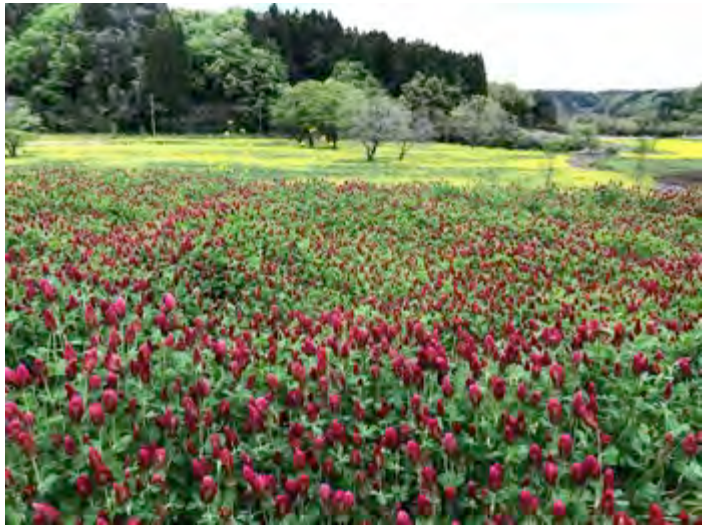
10月　種まき

●年1回のロータリー耕起＋播種で、美しい景観と地力増進を通年維持（＝流蜜も確保）

・遊休農地の管理多い課題として除草を兼ねて何度もロータリー耕起を繰り返すという行為。これにより土壌団粒が破壊され、地力は消耗し、より植生が荒れたものとなる。また、表土が風雨にさらされるほか、乾燥、ゲリラ豪雨による表土流出という損失もある。

・秋の種まきの際に、それぞれの圃場の特性に応じて複数の緑肥を混播することで、その土地と季節に応じた植物が適切に土壌表面を被覆し、常に適度な湿度と日陰を保ち、土壌微生物の多様性の維持、団粒促進の効果が得られる。また作業者側も、年に1度のロータリー耕起と、初夏の1回の高刈りで農地を維持できるため、条件の不利な農地においても大きな経費を投じずに継続的に管理しつづけることができる。これにより、養蜂業としても蜂蜜の生産性を高めることに貢献する。

「一石四鳥」の蜜源選定：　緑肥効果＋抑草効果＋景観形成＋蜜源効果



蜜源植物の選定においては、緑肥としての効果（地力増進）と、景観形成（関係人口の増加）、抑草効果、そして、蜜源としての効果（流蜜期間の継続）を視野に入れて有機的に組み合わせる。これらを、できる限り少ない労力で効果的に生育・管理する技術が必要。不法投棄の多かった箇所には「蜜源栽培」をメッセージとする看板を設置することで、不法投棄、ゴミの投機も一切なくなった。

養蜂体験イベント、ミニ養蜂教室などを定期的に開催し、近隣住民や市街地居住者にも活動への理解を深め、また事業としての経済的な収入源とすることで、活動を持続可能にしていく。企業研修などは比較的集積性の高い事業としてきたいできる。

【実例】離農農地の場合

・2018年9月　管理の引き継ぎ（無償）

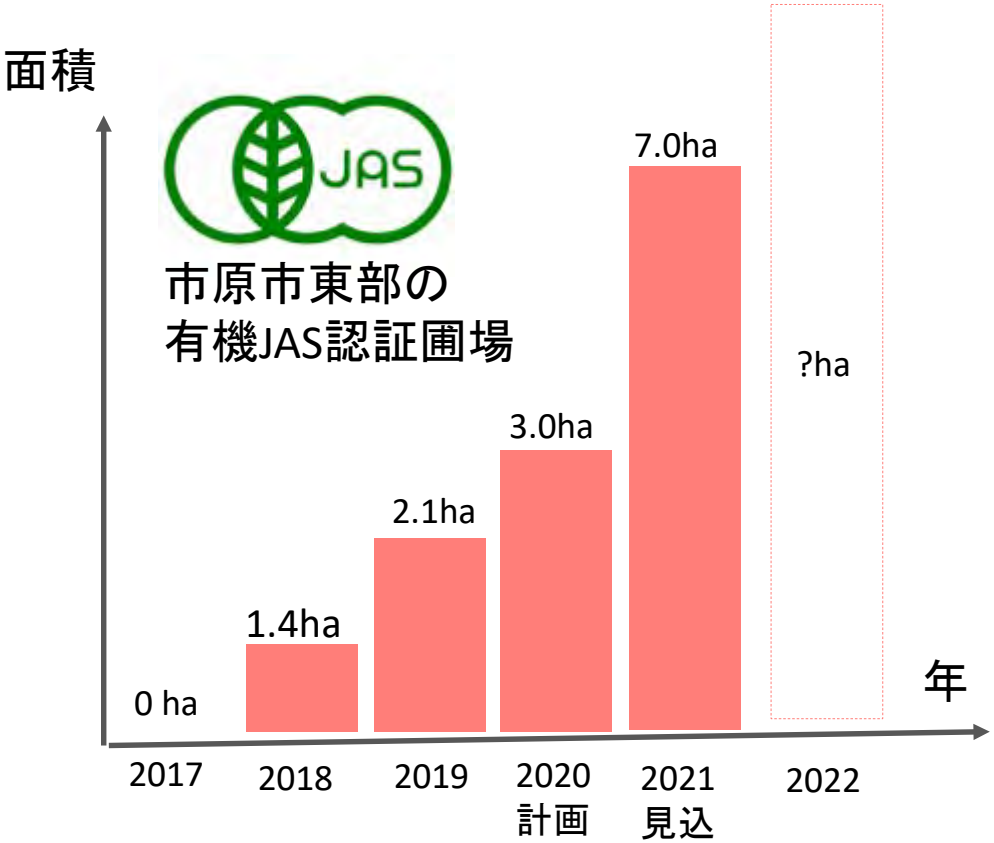
・2018年10月下旬　耕起・クローバー播種
　＝有機的管理の開始
　　※このタイミングで土壌分析をかけておく

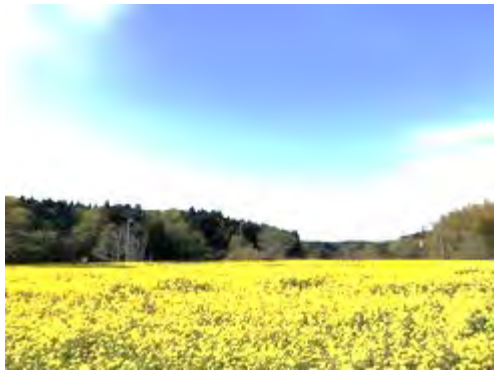
・2019年6月　フレールモアで繁茂部分の高刈り
・2019年7月下旬　施肥・鋤き込み

・2019年8月下旬　ブロッコリー定植

・2019年11月下旬～　収穫
（転換期間中有機農産物として出荷可能に）

離農（予定）農地を緑肥と蜜源植物で有機的に管理することで オーガニック・プレイヤーを呼び込む





地域における離農農地、あるいは離農予定農地については、地域で有機的管理を1年間行えば、その後に参入する就農者は、1年目から有機JAS認証農産物を出荷できるようになる。参入者にとって、すぐに有利販売できる環境を地域で整えておく。

この間を緑肥や蜜源植物で地力を増進しながら地域で管理することで、新規参入しやすくなる。

中房総 『里山革命』は、はじまっています！
～local & organic に挑戦する “Middle Boso Agricultures”～

中房総地区の条件不利な農地で、
様々なプレイヤーが新しいスタイルの
農業に挑戦しています。
→「オーガニック・トレイン」を支える商品に！

有機野菜とはちみつ

漢方薬栽培

農福連携と有機JAS

耕作放棄地からの
そば畑

オーガニック堆肥と
ケール栽培

ソーラーシェアリングと漢方

トロッコ列車と菜の花と
はちみつ

週末養蜂家のための
養蜂スクール

農地再生事業の手順
～まずは道路沿いから～

耕作放棄地の再生に向けて、まずなによりも重要なのは、「地域との信頼関係」「地域と一緒に取り組める事業」であること。

再生事業の手順としては、耕地もさることながら、市町村の許可を得ながら、農道や作業道路の周辺をまず綺麗に整備し、通行する地域住民、地元農家の賛同を得ることからスタートした。

道路沿いの土地を所有する地権者1件1件と交渉し、長年放置された竹やぶや杉林によって道路が暗く、凍結しやすくなっていることなどをご理解いただき、当方負担で、伐採、抜根処理を実施。

さらに地元自治体および町会の理解を得て、赤道の復元し、管理しづらい崖状の地形から、ゆるやかな斜面へと形状を変えることで、乗用の機械（モアなど）でも比較的安全に管理できる状態に改善。

隣接する農地の日当たりが劇的に改善し、排水性も改善、植生も改善された。